市民学芸員の素顔

社会の発展は地域の歴史や文化から！

子安修二さん（第Ⅷ期麦作文化探求型）

○市民学芸員に応募した理由は？

飯能に移り住んでから30年近くになります。勤めていたときは、朝6時に出て夜9時に帰ってくるだけの毎日で、飯能のことを知る機会もなかったんです。定年を迎えて地域のことを知ろうと思って応募しました。元々歴史、特に縄文文化には興味があったし、郷土館の活動に参画したいという気持ちもありました。作物をつくる経験も全くなかったのでそれも動機の1つです。郷土館があることは知っていましたが、身近に感じられなかったのでいいきっかけだと思ったんです。

○市民学芸員の魅力は？

とにかく農業の経験が全くなかったので、すべてが新鮮です。また篠宮さんや山川さんなど飯能に生まれ育った人と話す機会はほとんどなかったので、それも地域を知るよい機会となっています。農地の大きさ（9×4ｍほど）の割に参加人数は多いので、体力的に負担を感じることはありません。石臼で小麦を挽く作業は何日もかかって大変でしたが、それも小麦粉のいい香りが忘れさせてくれました。また、参加しているみなさんはそれぞれ一生懸命だし、他の活動も行っているのでいろいろな知識をもっていて、知らなかったことも教えてもらえる。現在、モニタリング1000（重要生態系監視地域モニタリング推進事業）の活動にも参加しているんですが、それも市民学芸員の人から誘われたものです。そこには鳥や植物などに詳しい人がいて毎回とてもおもしろい。

○今後の市民学芸員の活動について

麦作文化の方はこれから発信をしていくことになっているんですが、誰を対象にどのように発信していくのかは難しい問題ですね。1つには博学連携でやっているように子どもたちを対象にしたものが考えられますが、子どもたちは道具の名前も知らないし、土作りをすることから始めることも知ってもらう必要があるでしょう。農作業は四季の流れと関わってくるので、飯能の気候、風土に結び付けて伝えられるとよいと思います。それと他の分野の市民学芸員の活動も断片的にはわかっているんですが、全体像がつかめない。年2回ほどでよいから活動報告みたいな機会があるといいですよね。必ずしも発表会のような形式ばったものでなくてもいいと思いますよ。

○今の郷土館について

活気づけるには多くの人が来館することが必要でしょうが、多ければいいというものでもないと思うんです。ただ市外から飯能にやってくる人に来てもらうには、飯能駅から郷土館への道標は不可欠でしょう。また郷土館にムーミンの展示コーナーを作る必要はないが、ムーミンのテーマパークに来た人に飯能の自然を学んでもらうようなことはできるのではないかと思うんです。

市でもいろいろなことをやっていますが、たとえば古いおひな様がたくさん展示される雛飾り展も、それだけのものを用意できる財を貯えた飯能の町の歴史を知ってもらうことが大事でしょう。こういったイベントは手段としても重要です。ただし市民学芸員の目的は、飯能の歴史、文化、伝統を学び様々な手段を使って発信していくことにあると思います。歴史や文化をおろそかにしたら日本の土台が崩れてしまうような気がするんです。国際社会では郷土を語れない人間は根無し草のように信用されないと思いますよ。

小麦の刈り取り作業をする子安さん

事務局から

平成27年度から新しく始まった麦作文化探求型の市民学芸員。子安さんはその中でも毎回積極的に参加していただき、力仕事から細かい作業まで黙々とこなしています。他の市民学芸員からも頼りにされる存在です。麦作文化探求型の活動は「麦を育てる」ことから始まりましたが、それをもとに、飯能の気候や風土、飯能の魅力発信にまでつなげて考えていただけていることなど、事務局の考えと合致していてうれしい限りです。多くの仲間と知り合い視野を広げていくこと、これも市民学芸員の重要な役割の一つですので、引き続き、和気あいあいといっしょにやっていきましょう。

市民学芸員の素顔

地域の子どもたちとの交流は得がたいチャンス！

篠宮敏次さん（第Ⅴ期博学連携型・第Ⅷ期麦作文化探究型）

○市民学芸員に応募した理由は？

平成22年度に第Ⅴ期（博学連携参加型）・第Ⅵ期（古文書整理型）の市民学芸員を募集している記事が「広報はんのう」に出ているのを妻が見つけて、「お父さんが長らく集めてきた子どもの遊び道具や家にある昔の生活道具を活かせるんじゃない？」と勧めてくれたのがきっかけです。両親からものの大切さを教わってきて、なかなか捨てられないというものもあって取って置いたのですが、それをどうにか活かしたいという気持ちにもなっていました。若い頃から子どもの育成にも関心があって、地元で青少年健全育成には長らく関わってきましたし。

○その後、麦サークルにも参加しましたね？

麦作については、福島さんとの雑談の中で食育の観点からやってみよう、ということなったわけ。父親は会社勤めで日中は家にいませんから、子どもの頃から母親の手伝いをして畑にでていました。それほど大きくない畑でしたので、家で食べるものの足しにするくらいでしたが、大麦、小麦、サツマイモ、茶など一通りのものは作っていました。幼少からの経験があったので、これならできると思ったわけです。

○市民学芸員の魅力は？

一言で言えば「人との交流」に尽きます。人と交流することによって、幸せを分かち合うこともできます。ただ、それには健康であることと、参加できる環境が整っていることが必要だね。その点では家族に感謝していますよ。

博学連携の場合は、日々どんどん成長していく子どもたちとの接触で救われることがたくさんある。地元の第一小学校の見学の時に説明したりすると、その翌日、いつものように通学路で見守り活動をしていたら、児童の1人が「昨日はありがとうございました」と丁寧に御礼を言ってくれた。こうした地域での交流は、そこに育つ子どもにとっても、これから地域に関わっていくなかで支えになっていくと思う。お金に換えることのできないチャンスを与えてもらっていると思っている。

それと美杉台小学校に行って授業をした際、自分が小学1年生の時に着ていた服を持って行ったんだけど、実物があると説得力が増すね。自分の集めてきたものが役に立って嬉しかったよ。

○これからどのようなことをしていきたいですか？

麦作文化の方は、これまで栽培研究や知識の蓄積を行ってきたんですが、これからはそれをベースにして、さらなる探求をしていきたい。ここで郷土館が博物館になって、ビジターセンターの機能をもつようになるので、それにマッチした活動にしていきたい。収穫までのプロセスを掘り下げていけば小学3年生の見学プログラムにすることもできるんじゃないかな。今の時間だと上っ面なことしか説明できないのがちょっと残念だね。

麦作文化探求型の中心的存在である篠宮さん

事務局から

中山生まれの中山育ちで御年8〇年。元はお堅い職業であることを感じさせない、農業の深い知識と作業の手際良さ、そしてお百姓さんらしい出で立ち。飯能の戦前生まれの世代の方には、土とともに生きてきた経験をもつ人が多く、農事暦と密接に関わった時間軸をお持ちですが、まさにその典型のような方です。市民学芸員の活動も、原則に立ち返っていろいろと考えたうえでのご意見をいただいています。ものを大切にする心、土地とともに生きることなど私たちが失ってしまったものをぜひ、次の世代に伝えていってもらいたいです。

市民学芸員の素顔

生きがいを感じる市民学芸員の活動！

山川貞治さん
（第Ⅴ期博学連携型・第Ⅷ期麦作文化探求型）

○市民学芸員に応募した理由は？

元々は市内の小岩井の生まれで、28歳まで住んでいました。小岩井に住んでいた時は、自転車で飯能第一中学校まで通学していたんですが、その頃の一中は、私が住んでいた第二地区のほかに、現在の旧飯能地区、精明地区、加治地区の生徒が通っていたんです。友達に宮沢の子がいて、宮沢湖に泳ぎに行ったこともありますよ。いろんな地区から生徒が来ていたんで、地域によってずいぶん違うということは何となく感じていました。その後青木に引っ越してもう50年以上住んでいますが、全然飯能ことを知らないなあと思っていたんです。そこで広報はんのうの記事を見て応募したんですが、実際に養成講座を受けてみて、講座の内容が本当に素晴らしかった。

○養成講座のどんなところが良かったですか？

特に学校の先生から、小学3年生というのは、成長の過程でちょうど「脱皮」する時期にあたりとても大事である、と聞いたのは良かったですね。実際、子どもたちの見学の相手をしていると、知識を求める目が素晴らしいです。

○市民学芸員の魅力って何でしょう？

博学連携の方は、みなさんとても魅力的です。そうした中で一緒に活動できるのは素晴らしいことだし、深いお付き合いができている人もいて、生きがいを感じているんですよ。また学芸員（職員）の方もとてもよく勉強されていて、その人たちから学べることにも感謝しています。市民学芸員での学びは私自身の支えになっていて、これがあるからぼけないでいられるんじゃないかな（笑）。

○その後、麦作文化探求型にも参加されました。

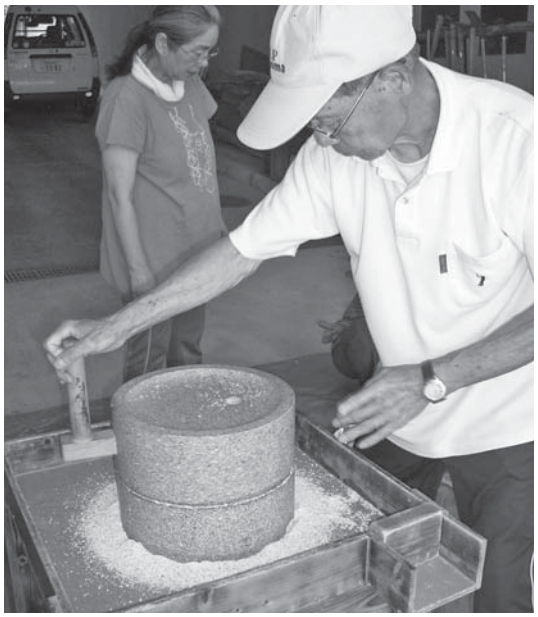
小岩井にいた頃は畑の手伝いもしていたので麦作についても多少は知っているけど、1人で畑仕事をするのは大変なので、10人くらいで一緒に耕したり、種をまいて育てて汗を流すのはとても楽しいです。それに畑で作った大麦が小学3年生の見学の時に石臼体験で使ってもらえるのも嬉しいことです。

○郷土館が博物館になりましたが。

大勢の人に来てもらいたいです。博物館は自信をもってお薦めできます。新しくできた自然のコーナーもとっても良いです。そこで飯能の四季の移り変わりを味わってもらえれば、と思っています。

○これから市民学芸員になる方に何かメッセージを。

来年度は養成講座もあるので、新しく市民学芸員になってくれる方には期待していますよ。定例会にも出席して学ぶ喜びを感じてほしいです。人との出会い、文化財との出会いは素晴らしい体験ですよ。意識していれば1日1日が素晴らしい日になります。新しい人がのびのびと参加できるように応援していきたいですね。



麦作文化探求型の活動で石臼を挽く山川さん

事務局から

普段は店蔵絹甚の解説員もされている山川さん。絹甚を訪れるお客さんに博物館へ行くことを積極的にお薦めしていただいているとのこと、ありがとうございます。絹甚に来た人からいろいろと訊かれるからと、町の歴史に関わるたくさんの質問をいただき、私たち学芸員もたじたじです（勉強不足ですいません）。そこに飯能に対する愛着の強さを感じることができます。好奇心が旺盛でいつも学ぶ姿勢にあふれている山川さん。麦作の方でも指導的な役割を果たしていただき助かっています。飯能の畑作文化の伝承もぜひお願いします。

市民学芸員の素顔 Profile of Citizen Curator

「憧れる飯能」から「誇れる飯能」へ。

福嶋信子さん（第Ⅴ期博学連携型・第Ⅷ期麦作文化探求型）

○市民学芸員に応募した理由は？

以前は入間市に住んでいたんですが、飯能は故郷の秩父に近く憧れの場所でした。10年前に飯能に住むようになり、飯能のことを知りたいと思って市民学芸員に応募したんですが、活動の内容が小学生の見学対応だと知って、ちょっと引きました。自分としては伝えることは考えていなかったんです。

○でも観光のガイドもされていますよね？

エコツアーでガイドを始めたのも市民学芸員と同じ頃で飯能のことを知りたかったから。でも市民学芸員と観光ガイドは全く違って、市民学芸員は館の方針とずれないようにしなければなりませんが、エコツアーの場合は客さんに合わせることが大切です。また飽きられないようにできるだけ砕けた感じで話すことを心がけています。

○博物館は観光に貢献できるでしょうか？

市民学芸員をしていると知識が深まります。博物館には（本務）学芸員がいて、相談するとはっきりした回答をしてくれます。そうすると自信をもってエコツアーのお客さんに対応できます。博物館には資料とか情報の提供をお願いしたいです。

○当館について期待することは？

市民に身近な博物館であってほしいです。博物館に来ると実物を見ることができる、いろいろな体験ができる、というのがよいと思います。リニューアルオープンしてから自然のコーナーはよく変わるし、歴史展示室の方も「うちおり」(着物)とかが時々替わっていて、前に見た時とは違う資料が出ている、というのがわかればまた来てくれるのではないかな。展示替えをしていることをもっと一般の人にアピールすべきだと思います。

○市民学芸員の魅力とは何ですか？

小学3年生のプログラムを市民学芸員の仲間といろいろ議論しながら一緒に作り上げていったことが忘れられないですね。その中には（本務）学芸員も加わっていて。また麦作文化探求型の場合、最初はサークル活動から始まって、西側の敷地を開墾して畑を作り、そこで収穫された大麦が小学3年生の石臼体験に使われてひとつの分野に昇格できた。自主性が重んじられているところも魅力ですね。

○まだ市民学芸員になっていない人に

市民学芸員は活動を通していろいろなことを知ることができて嬉しいです。この年になって知る楽しさを今味わっているところです。また、現地研修会や講演会などによって専門家の話が聞けることや、他の地域のことも学べるのがよいところかな。また市民学芸員は年齢も経験も様々なので、視野が広がり楽しい活動になります。市民学芸員の活動に参加するようになってから「憧れの飯能」から「誇れる飯能」へと変わりました。

歴史展示室で小学３年生の児童に説明する福嶋さん

事務局から

現在の博物館には観光の拠点としての役割も求められていますが、それを10年も前から実践されている福嶋さん。前に福嶋さんたちが主催するエコツアーに参加しましたが、お客さんを惹きつけるためいろいろな工夫をされていて、自分が普段している展示の説明を反省しました。いろいろなことに興味をもち、矢継ぎ早の質問にたじたじとなる場面もしょっちゅうで、われわれの勉強不足を感じさせてくれるありがたい存在です。観光と博物館の橋渡し役として期待しています。その旺盛な好奇心でこれからもどんどん飯能の魅力を伝えていって下さい！